

高句麗人名の中の固有語

梁 紅 梅

1. 研究の目的

高句麗の言葉を研究するには高句麗の人々の間で実際に使われた固有語を選び出すことがとても重要である。今までの高句麗語に関する先行研究では地名が研究対象に選ばれることが多かった。しかし伊藤英人（2019）の研究などによると、歴史文献に記録された地名は高句麗語ではなく、その地に住んでいた原住民たちの言葉である可能性が指摘された。

高句麗國の人名は高句麗の固有語である可能性が高いⁱ。李基文（1991: 324）では「高句麗語はアルタイ系言語の要素をもっている。モンゴル語、トルコ語などに見える特徴が高句麗語にも見ることができる」とした（本稿筆者が韓国語から和訳）。モンゴル、満州など多くのアルタイ系民族の人名は固有語から作られることが多いⁱⁱ。伝統的なモンゴル族と満州族は苗字を持たず、名前だけで作られた。人の名前は体の特徴を模倣して作ることがあれば、英雄の名前、部族の名前をそのまま使う場合もあった。特に女性の名前は部族名か父親の名前から文字を取って呼ばれていたことがわかったが、高句麗國の事情からも同じ特徴がみられた。鮎貝房之進（1973）で指摘した通り高句麗人は初期には姓を持たず、漢文化の影響とともに徐々に姓を取りいれたと考えられるが、実際に高句麗の人名では姓と名を分けるのは困難である。

本稿では高句麗語の人名データの中で固有語として処理できるものを選びだす基準と方法を提示し、最後に実際の高句麗語の固有語を確立することを目的とする。

2. 研究資料と研究方法

本稿では主に『三国史記』と『日本書紀』に現れた高句麗人名データを基にして、『旧唐書』、『広開土王碑文』、『三国遺事』、『新撰姓氏録』などの歴史文献の中での記録もあわせて検討した。研究方法としては歴史事実を基に、漢字の音価と意味などを考察し、固有語の範疇に入れられないものをより出して、純固有語を抽出した。

3. 高句麗の固有語

高句麗人の人名の中で固有語として処理できるのは『三国史記』では合計171個、『日本書紀』で40個ある。高句麗語として解釈できる分類基準を以下の伝説上の人物、王の諱と諡、苗字、女性の名前、高句麗國の代表的な国姓、伊梨柯須彌などをあげて検討してみる。

① 高句麗國の始祖である朱蒙王に関しては生まれた背景をめぐって多くの伝説が伝えられた。伝説の中にはいろいろな人物が登場するが、その名前に関しては人名とは言いにくいが、実際に固有語として処理すべきものもある。それが金蛙、柳花、河伯、解慕漱である。

ⁱ 口頭発表文による。

ⁱⁱ 남윤삼, 몽골의 성명체계와 성명법, 법학논총 31(1), 2018, 6.

「扶余王解夫妻老無子祭山川求嗣…其石有小兒金色蛙形…名曰金蛙。」

『三国史記 卷13 麗紀1』

〔扶余王の解夫妻が年をとっても子がなかった…石の中に小児がいたが金色で蛙の姿をしていた…なので金蛙に名前を付けたⁱⁱⁱ。〕

「我是河伯之女名柳花…」『三国史記 卷13 麗紀2』

〔私は河伯の娘の柳花で…〕

金蛙に関しては「有小兒金色蛙形」として金色と蛙の姿から名前が付けられたことがわかる。河伯と柳花は河と花に関係あるものだが、これらは意味から生じた漢字語だと言えるので固有語とは考えにくい。

解慕漱は天帝の子として『三国史記』と『三国遺事』に記録されている。文献の中では一番早い時期に解という苗字を持つ人物になるが、『三国史記』では高句麗の朱蒙王の父として、また『三国遺事』の注釈では扶餘王の解扶妻の父としても登場する。

「其旧都有人不知所從来自称天帝之子解慕漱來都焉。」『三国史記 卷13 麗紀1』

〔扶餘国の旧都に、どこからやってきたかわからないが、天帝の子の解慕漱と自称する人が、都をひらいた。〕

「有一男子自称天帝之子解慕漱誘惑於熊心山下…。」『三国史記 卷13 麗紀1』

〔…自分で天帝の子の解慕漱であるといい、私を熊心山の麓に誘い…〕

井上（1983）の注釈では「解の音は韓国語の太陽にあたる 해/hʌi/ を表し、『旧三国史』には解慕漱の別名を天王郎といい、太陽神を言う」とした。解の音価が /hʌi/ という太陽の意味だとすると、慕漱は子の意味を持つ言葉だと推測できるが、今のところまだはつきり確定することはできない。このような事情から解慕漱は高句麗語だと考えられる。

② 高句麗人名の中で王と関連する名前が重要な位置を占めている。

「慕本王諱解憂一云解愛妻大武神王元子」『三国史記 卷14 麗紀2 八』

〔慕本王は諱を解憂あるいは解愛妻といい、大武神王の嫡子である。〕

「葬於慕本原號為慕本王。」『三国史記 卷14 麗紀2 九』

〔慕本原に葬って、號を慕本王にした。〕

「閔中王諱解色朱大武神王之弟也。」『三国史記 卷14 麗紀2 七』

〔大武神王の弟で太子が幼いことから王になった。〕

「葬於石窟號為閔中王。」『三国史記 卷14 麗紀2 八』

ⁱⁱⁱ 『三国史記』の解釈はすべて井上秀雄（1983）を参照した。

〔石窟に葬って、號を閔中王にした。〕

…

例文のように王には諱と號の諡が付けられた。諡は「葬於慕本原號為慕本王。」のように王が死んだ後の埋葬地などに因んで贈られたものなので高句麗語の範疇には入れられない。

王の諱にはまた一云、或云、小名などを使っていくつかの名前が並べられている。

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■^{iv} 一云象解。」『三国史記 卷13 麗紀1 一』

〔始祖東明聖王は姓が高氏で諱は朱蒙といい、一名は鄒■、一名は象解という。扶餘の俗語で矢射が上手な人を朱蒙という。〕

「瑠璃明王立諱類利或云孺留。」『三国史記 卷13 麗紀1 五』

〔瑠璃明王が即位した。諱を類利あるいは孺留といった。〕

「慕本王諱解憂一云解愛妻大武神王元子」『三国史記 卷14 麗紀2 八』

〔慕本王は諱を解憂あるいは解愛妻といい、大武神王の嫡子である。〕

「大祖大王諱宮小名於漱琉璃王子古鄒加再思之子」『三国史記 卷15 麗紀3 一』

〔大祖大王は諱を宮、幼名を於漱といい、琉璃王の子の古鄒加の再思の子である。〕

「故國川王諱男武或伊夷謨新大王伯固之第二子」

『三国史記 卷16 麗紀4 三』

〔故國川王は諱を男武或は伊夷謨といい、新大王伯固の第二番目の子である。〕

「山上王諱延優故國川王之弟也」『三国史記 卷16 麗紀4 七』

〔山上王は諱を延優として故國川王の弟である。〕

「東川王諱憂位居少名郊彘」『三国史記 卷17 麗紀5 一』

〔東川王は諱が憂位居で少名は郊彘である。〕

「西川王諱藥盧一云若友」『三国史記 卷17 麗紀5 五』

〔西川王は諱を藥盧として、若友とも言った。〕

「烽上王一云雉葛諱相夫或云歟矢妻西川王之太子也。」

『三国史記 卷17 麗紀5 八』

〔烽上王は雉葛とも呼び、諱は相夫或いは歟矢妻と言って、西川王の太子である。〕

「美川王諱乙弗（或云）憂弗西川王古鄒加咄固之子。」

^{iv} 『三国史記』では鄒の後ろの漢字が消されて■になっているが、『三国史記』鉄字本では鄒の次は空白になっている。

『三国史記 卷17 麗紀5 十』

〔美川王は諱を乙弗或いは憂弗とし、西川王の古鄒加の咄固の子である。〕

「故国原王諱斯由或云劉。」『三国史記 卷18 麗紀6 一』

〔故国原王は諱を斯由或いは劉とする。〕

「故国壤王諱伊連或云於只支小獸林王之弟也」『三国史記 卷18 麗紀6 四』

〔故国壤王は諱を伊連或いは於只支とし、小獸林王の弟である。〕

「嬰陽王諱元一云大元平原王長子。」『三国史記 卷20 麗紀8 一』

〔嬰陽王は諱を元一名大元にし、平原王の長子である。〕

「栄留王諱建武一云成嬰陽王異母弟也。」『三国史記 卷20 麗紀8 十二』

〔栄留王は諱を建武一名成とし、嬰陽王の異母弟である。〕

まとめてみると、朱蒙（一云）鄒牟^v（一云）象解、類利（或云）孺留、解憂（一云）解愛妻、宮（小名）於漱、男武（或云）伊夷謨、延優（一名）位宮、憂位居（少名）郊彘、藥盧（一云）若友、相夫（或云）歟矢婁、乙弗（或云）憂弗、斯由（或云）劉、伊連（或云）於只支、元（一云）大元、建武（一云）成がある。これらの名前では朱蒙（一云）鄒牟のように音価が類似しているものがある一方、朱蒙（一云）象解では音韻的つながりが考えにくい。また宮（小名）於漱、憂位居（少名）郊彘は小名と少名を使って子供の時の名前を記録したが、こちらも音韻論的にはつながりが見えにくい。他に一云と或云を使って異名を記録したがその違いがはっきりしない。朱蒙（一云）鄒牟は「広開土王碑文」鄒牟として記録されていることから、一云の次に書かれた名前は異なる文献での記録を指すと考えられる。或云と記録された場合、類利（或云）孺留の記録は『三国史記』にしか記録がなく、同じ人物に対する二つの称号として処理するしかない。

③ 『三国史記』の中では初期に出てくる人物には王から苗字を贈られたものがある。高句麗国の後期になると、漢族の名前に似ている名前が登場するが、泉男建と泉男生のように兄弟の名前に同じ漢字を使ったものもある。

「朱蒙賜再思姓克氏武骨仲室氏默居少室氏…遇此三賢豈非天賜乎。」

『三国史記 卷13 麗紀1』

〔朱蒙は再思に克氏という姓を与え、武骨には仲室氏、默居には少室氏の姓を与えた。…この三人の賢者に遭うことができたが、どうして天の賜りものではないと言えましょうか。〕

このほかに琉璃王と大武神王の時に羽氏、負鼎氏、絡氏などの苗字も登場するが、これらはすべて王から与えられたものだった。

^v 『三国史記』本編では牟のところが消されているが井上秀雄（1983）などを参考に鄒牟とした。

「得異人兩腋有羽登之朝賜姓羽氏…」『三国史記 卷13 麗紀1 八』
〔異人を得たが、両脇には羽があったので羽氏の姓を賜った…〕

「有一壯夫曰是鼎…遂賜姓負鼎…」『三国史記 卷14 麗紀2 二』
〔健康な男がいて鼎だと答えた…負鼎氏の姓を賜った…〕

「其背有絡文賜姓絡氏。」『三国史記 卷14 麗紀2 三』
〔その背中に絡模様があつたので絡氏の姓を賜った。〕

この記録から初期の高句麗族は恐らく姓を持っていなかつたと考えられる。

「蓋蘇文死長子男生代為莫離支」『三国史記 卷22 麗紀10 七』
〔蓋蘇文が死んで長男の男生が代わりに莫離支になった〕

「使其弟男建男產留知後事…」『三国史記 卷22 麗紀10 七』
〔その弟の男建と男產に後のことを頼んだ…〕

泉蓋蘇文の息子である泉男生、泉男建、泉男產は兄弟の名前に同じ男という文字を使つてゐる。これは漢文化の影響だと考えられる。高句麗前期と中期の名前を見ると瑠璃明王の子孫は都切、解明、無恤が登場したが、兄弟であつても名前に同じ文字は使わなかつた。

「二十年春正月大子^{vi}都切卒。」『三国史記 卷13 麗紀1 七』
〔二十年春の正月に大子の都切が卒去した。〕

「二十三年春二月立王子解明為大子。」『三国史記 卷13 麗紀1 八』
〔二十三年春の二月、王子の解明を大子にたてた。〕

「無恤瑠璃王第三子…」『三国史記 卷14 麗紀2 一』
〔無恤は瑠璃王の第三子であった。〕

また大武神王の子孫は好童、解憂がいたが、名前には違う文字が書かれた。

「好童王之次妃曷思王孫女所生…」『三国史記 卷14 麗紀2 六』
〔好童は王の次妃の曷思王の孫女からうまれた…〕

「十二月立王子解憂為大子…」『三国史記 卷14 麗紀2 七』
〔十二月に王子の解憂を大子にした…〕

また漢族式の名前として考えられるのは李文真がある。

^{vi} 井上秀雄（1983）などでは大子を太子に直したが、本稿では文献とおりに大子とした。

「詔大学博士李文真約古史為新集五卷国初始用漢字時有人記事一百卷名曰留記至是刪修。」『三国史記 卷20 麗紀8 二』

〔大学博士の李文真に命じて、古い歴史書を簡略にして、『新集』五卷を編纂させた。建国後まもなく漢字を使い始めたときに、ある人が事柄を、百巻も書き記した。名付けて『留記』という。このときになって整理・編集した。〕

李文真^{vii}は高句麗の博士として登場するが、鮎貝房之進（1973）^{viii}では李文真を漢人として扱った。本論文では泉男生、泉男建、泉男產と李文真は固有語から排除することにした。

④ 高と解は高句麗人名の中でも使用頻度がかなり高い。高という姓は高朱蒙をはじめ高句麗の国姓として位置付けされたが、大臣の姓としても多く登場する。井上秀雄（1983: 24）によれば「高句麗王が高氏を称した初見は『宋書』高句麗伝の高璫（長壽王）である。この高は北燕王の高に由来するもので、高句麗の高をとったものではない。」とした。

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■一云象解、扶餘俗語善射為朱蒙。」

『三国史記 卷13麗紀1一』（1145）

〔始祖東明聖王は姓が高氏で諱は朱蒙といい、一名は鄒■、一名は象解という。扶餘の俗語で矢射が上手な人を朱蒙という。〕

「九月東海人高朱利獻鯨魚目夜有光」『三国史記 卷14麗紀2八』

〔東海地方の人の高朱利が鯨を献上した。その目は夜でも光っていた。〕

『三国史記』には他にも高朱利、高福章、高優婁、高奴子、高翼、高仇などの名前が登場する。高という文字は名前の第一音節で9回も使われていて、その使用頻度がとても高い。

解は象解、解夫婁、解慕漱、解明、解憂（一云）解愛婁、解色朱など扶余の王と初期の高句麗の王には解が語頭の文字としてよく使われた。

「扶余王解夫婁老無子」『三国史記 卷13 麗紀1』

〔扶余王の解夫婁が年をとっても子がなかった〕

「其旧都有人不知所從来自称天帝之子解慕漱來都焉。」『三国史記 卷13 麗紀1』

〔扶餘國の旧都に、どこからやってきたかわからないが、天帝の子の解慕漱と自称する人が、都をひらいた。〕

「世子解明在於別都以好勇。」『三国史記 卷13 麗紀1 九』

〔王太子の解明は、古都にいて力が強く、武勇を好んだ。〕

^{vii} 詔大学博士李文真約古史為新集五卷『三国史記 卷20 麗紀8 二』

^{viii} 鮎貝房之進（1973: 85）「此の大博士李文真と云うは、恐らく其姓名より判断するも漢人たるべし。」としている。

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■一云象解」『三国史記 卷13麗紀1 一』

〔始祖の東明聖王は姓を高氏にし諱は朱蒙あるいは鄒■、あるいは象解とする。〕

鮎貝房之進（1973）などの研究では「解」は朝鮮語の太陽にあたる /hay/ として解釈した。本稿では「解」は姓よりは何か意味を付与した高句麗語の語彙だと解釈したい。「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■一云象解」では解が象の次の音節に使われた。つまり解は太陽の意味を持つ高句麗語の語彙であり、姓ではないと考えられる。以上の理由から本論文では高と解も検討の範囲に入れることにした。

⑤ 女性の氏名

『三国史記』では女子の氏名として禮（氏）、松（氏）、禾（姫）、雉（姫）、于（氏）、掾（氏）、貫那（夫人）、周（氏）などが登場する。

禮（氏）：「朱蒙在扶餘娶禮氏。」『三国史記 卷13 麗紀1 五』

〔朱蒙が扶餘で禮氏を娶った。〕

松（氏）：「冬十月王妃松氏薨。」『三国史記 卷13 麗紀1 六』

〔冬十月王妃の松氏が薨去した。〕

納多勿候松讓之女為妃 『三国史記 卷13 麗紀1 五』

〔多勿候の松讓の娘を入内させて王妃にした。〕

禾（姫）：「禾姫鶴川人之女。」『三国史記 卷13 麗紀1 六』

〔禾姫は鶴川人の娘であった。〕

雉（姫）：「雉姫漢人之女。」『三国史記 卷13 麗紀1 六』

〔雉姫は漢人の女であった。〕

于（氏）：「立妃于氏為王后提那部于素之女。」『三国史記 卷16 麗紀4 四』

〔于氏を王后にたてたが、提那部の于素の娘であった。〕

掾（氏）：「立掾氏為王后。」『三国史記 卷17 麗紀5 五』

〔掾氏を王后にたてた。〕

貫那（夫人）：「貫那夫人顏色佳…立以為小后。」『三国史記 卷17 麗紀5 五』

〔貫那夫人は顔色がよくて…小后にたてた。〕

周（氏）：「獲王母周氏。」『三国史記 卷18 麗紀6 二』

〔王母の周氏をつかまえた。〕

王妃は姓+氏、小后は姓+夫人、妃は姓+姫を使って呼び名が付けられている。松氏、于氏

とは父親の名前の松譲、于素から最初の一文字取って呼び名とした。井上秀雄（1983）でも言及した通り松譲と于素が苗字として松と于を持ったと信じ難く、恐らく名前として扱うべきである。周氏は美川王の王母だが、出身がはっきりわからないので固有語に入れるしかない。禮氏、禾姫は扶余あるいは高句麗民族の可能性が高いし、掾氏と貫那夫人は部族の掾那部と貫那部から呼び名を受けたと考えられる。

「東川王…母酒桶村人入為山上小后史失其族姓。」『三国史記 卷17 麗紀5 一』

〔東川王…母は酒桶村の人で、入内して山上王の小后になった。史家は王母の族姓を忘失した。〕

東川王に関する記録では母親の族姓という言及があった。姓あるいは名の言葉を使わずに、族姓と書かれてあるのは高句麗語で女性は部族の名前から呼ばれたからだと考えられる。

以上の例から『三国史記』の中で女性は部族或いは家族の名前から呼び名を受けたと考えられる。この中で「雉姫漢人之女」の記録から雉姫を除いて他の女性の呼び名は全部高句麗語だと確立できる。

⑥ 『日本書紀』には43個の高句麗人名が記録されている。その中で仲牟王、男生、王安は『三国史記』高句麗紀でも出た人物なので実際に『日本書紀』では新しく40個の高句麗人の名前が登場した。その中で伊梨柯須彌という人物が登場するが、『三国史記』の泉蓋蘇文或いは蓋金と同じ人物だと考えられる。

「蓋蘇文弑王。」『三国史記 卷20 麗紀8 十五』

〔蓋蘇文は王を殺した。〕

「王及莫離支蓋金遣使謝罪。」『三国史記 卷21 麗紀9 十四』

〔王と莫離支の蓋金は使者を派遣して謝罪した。〕

「蓋蘇文或云蓋金姓泉氏…」『三国史記 卷49 列伝 9 二』

〔蓋蘇文或いは蓋金は姓が泉氏であり…〕

「秋九月、大臣伊梨柯須彌弑大王…。」『日本書紀 皇極天皇元年 卷24』

〔秋九月、大臣の伊梨柯須彌が大王を殺した…^{ix}。〕

「新羅春秋智、不得願於内臣蓋金。」『日本書紀 齊明6年 卷27』

〔新羅の春秋智、願いを内臣蓋金に得ず。〕

「蘇文姓錢氏…」『旧唐書 卷199 列伝 149』

伊梨柯須彌に関しては先行研究で多くの論争があった。以上の記録からは苗字が泉或いは

^{ix} 本文中の『日本書紀』の解釈は坂本太郎ほか（1974）を参照した。

錢、伊梨であり、名前は蓋蘇文、蓋金、柯須彌であったことがわかる。池内宏（1960: 271）によれば錢は泉の音通であるが、『三国史記』新羅本記に登場する蓋蘇文の弟の名前が淵淨土なので、淵が姓であるとした。唐高祖の諱を避けるために泉を使ったが、淵の発音は伊梨に近いし、加須彌は蓋蘇文の音訳であるとした。原音を Ir ka - sum と再構した。

鮎貝房之進（1973: 77）は「乙は方言泉に当てたる借字なり。朝鮮古地名に泉の方言に「於乙」、「乙」を当てたる例証。…此の乙氏を漢文名泉氏と称したるは蓋蘇文其最初たるべきも日本書紀に拠れば句麗にて實際泉氏とを称したるか疑問なり如何となれば齊明紀句麗亡滅前まで使人が皆方言乙を称し居ればなり。」「乙」は方言「泉」にあてたる借字なりとして「新撰姓氏錄」に出である伊利、伊理は勿論皇極紀の伊梨と同姓なるが、中に溢士も同姓たるは、溢、一は伊梨と同音たればなり。斯、須、士等は尾辞、有無は問題にあらず、また「伊利須意彌と伊利之は同一人になる」とした。実際に『新撰姓氏錄』では伊梨と音価が類似する伊利、伊理を姓とする名前を多く収録したが、伊利之、伊利之使主、伊利斯沙礼斯、伊利須、伊利須意彌、伊利須使主、伊理和須使主などがあった。この解釈からすると泉という姓は高句麗語では実際には乙にあたるものだった。その発音が伊梨であったが、柯須彌は尾辞にあたる。

以上の研究から考えられるのは伊梨柯須彌が指す人物は蓋蘇文であるが、伊梨は固有名詞で水と関係するものを指す固有語で^x乙という発音が似ていながら、漢字の淵、泉、錢などがあてられた可能性が高い。柯須彌に関してはほとんどの研究では蓋蘇文の日本語での発音として解釈しているが、尾辞の可能性が高い。つまり伊梨は固有語、柯須彌は尾辞であった。

高句麗の固有語として使われるのは伊梨蓋蘇文だと考えられる。ただし、『日本書紀』では「秋九月、大臣伊梨柯須彌弑大王…以己同姓都須流金流為大臣」『日本書紀 卷24 皇極元年9』〔秋九月、大臣の伊梨柯須彌が大王を殺して…己が同姓^{xi}都須流金流を大臣とす。〕との記録があるが、伊梨を付けていないことが疑問になる。

4. 結論

本論文では高句麗国の人々の中で伝説上の人物の名前、苗字、女性の呼び名、伊梨柯須彌などに関して、歴史事実、音価、意味分析などから検討し、固有語として認定できるものを抽出した。

- ① 伝説上の人物に関しては金蛙、河伯、柳花などは意味を持っている漢文として処理できるため固有語には当たらないが、解慕漱は象徴的な意味を持っている固有語として認められる。
- ② 姓に関しては『三国史記』では王が臣下に与える場面が多く、初期の高句麗人は特に姓は持たず、恐らく漢文化の影響で一つの賞美として与えられたことが推測できる。高と解は國の姓あるいは氏族の姓なので固有語に入れられる。
- ③ 王后と妃の全名は記録されたことがなく、部族の名前から或いは父親の名前から一文字を取ってそこに氏を付けた形で書かれているので固有語に入れられる。ただはっきり漢人だとわかる雉姫は検討から外す。

^x 西域に伊犁河があるが、歴史では伊列、伊麗、伊勒などの文字を使い光明顯達の意を表した。

^{xi} 『日本書紀』日本古典文学大系の注釈では同姓をulkaraの約とし、ul-は男性の血族、karaは父系外婚氏族をいうと解釈したが、本論文では同姓の意味を同じ苗字として解釈したい。

- ④ 泉蓋蘇文と伊梨柯須彌は伊梨という固有名詞と柯須彌は尾辞の可能性が高く、実際の固有語は伊梨蓋蘇文であると推測した。
- ⑤ 全体的に見ると『三国史記』では171個の固有語、『日本史記』では40個の固有語が現れた。

表

『三国史記』の人名一覧表

卷	麗紀	年号	張	名前
13	1	東明聖王	一	高朱蒙（一云）鄒（一云）象解、解夫妻、阿蘭弗、解慕漱
			二	朱蒙、帶素、烏伊、摩離、陝父
			三	朱蒙、再思、武骨、默居、松讓
			四	松讓、烏伊、扶芬奴、扶尉獸
		瑠璃明王 (琉璃)	五	類利、孺留、禮（氏）、朱蒙、屋智、句鄒、都祖、松讓
			六	松（氏）、禾（姬）、扶芬奴
			七	扶芬奴、帶素、都切、託利、斯卑、薛支
			八	沙勿（姓）位（氏）、陝父、解明
			九	解明
			十	帶素、無恤
			十一	延丕、驕、無恤
			十二	無恤、烏伊、摩離、祭須
14	2	大武神王	一	無恤、松讓、帶素
			二	麻盧
			三	帶素、怪由、乙豆智
			四	松屋句、豆智
			五	尚須、尉須、于刀、仇都、逸苟、焚求、鄒勃素
			六	勃素、大室（氏）、好童
		閔中王 慕本王	七	好童、解憂、解色朱
			八	高朱利、載升、解憂（一云）解愛妻、翊
			九	杜魯
15	3	大祖大王	一	宮、於漱、再思、都頭
			二	達賈、薛儒、乙音
			三	遂成
			四	遂成、尉仇台、穆度婁、高福章、彌儒、菴支留、陽神
			五	遂成、高福章、伯固
			六	遂成、高福章
		大祖大王 次大王	七	遂成、彌儒、高福章
			八	穆度婁、菴支留、陽神、莫勤、莫德
			九	明臨答夫

16	4	新大王	一	伯固／句、菴支留、鄒安
			二	優居、然人、答夫
		故國川王	三	男武（或云）伊夷謨、伯固、伊夷謨、拔奇、加
			四	于（氏）、于素、鬪須 於界留 左可慮
			五	晏留、乙巴素、乙素
			六	巴素
		山上王	七	延優（一名）位宮、于（氏）、發岐、延優、男武
			八	延優、男武、鬪須、發岐
			九	發岐、乙巴素、高優婁
			十	郊彘
			十一	然弗
17	5	東川王	一	憂位居、郊彘、高優婁、明臨於漱
			二	然弗
			三	密友、劉屋句、紐由
			四	密友、紐由、多優、王儉
		中川王 西川王	五	然弗、據氏、預物、奢句、明臨於瀨、貫那（夫人）、藥盧、 明臨笏觀、藥盧（一云）若友、于漱、陰友、尚婁
			六	
		烽上王	七	陰友、達賈、逸友、素勃
			八	相夫（或云）歛矢婁、達賈、高奴子、咄固、乙弗、尚婁、倉助利
		美川王	九	倉助利、高奴子、乙弗
			十	乙弗、憂弗、咄固、陰牟、再牟
			十一	倉助利、蕭友、乙弗、斯由
			十二	如努
18	6	故國原王	一	斯由（或云）劉
			二	武、阿佛和度加、周（氏）
		小獸林王 故國壤王	三	丘夫、周（氏）
			四	丘夫、伊連或云於只支
		廣開土王	五	伊連、談德
		長壽王	七	高陽（氏）、巨連（一作）璉
			八	高翼
			九	葛盧、孟光、孫漱、高仇
			十	漱、仇
			十二	餘奴
19	7	文咨明王	一	羅云、助多、升干
			二	興安
			三	芮悉弗、高老
		安臧王	五	興安

		安原王	六	寶延、平成
		陽原王	七	平成
			八	高絃
		平原王	九	于朱理、陽成（湯）、元
20	8	豐陽王	一	元（一云）大元
			二	高勝
			八	乙支文德
			九	文德
		榮留王	十二	建武（一云）成
			十四	桓權
			十五	蓋蘇文
21	9	寶臧王	一	臧（或云）寶臧、蓋蘇文
			二	蓋蘇文
			三	蓋蘇文、高文
			十四	蓋金
			十五	蓋蘇文
22	10		二	任武
			四	安固
			六	惱音信
			七	蓋蘇文、福男（新唐書云男福）
			十一	安勝、劍牟峯、安舜（羅紀作勝）、
			十二	寶元、德武
45	列伝5		十三	溫達
	列伝9		一	倉助利
49	列伝9		二	泉蓋蘇文（蓋金）

『日本書紀』の人名一覧表

卷	年号	ページ	名前
10	応神37年2	上379	久禮波
10	応神37年2	上379	久禮志
15	仁賢6年	上532	奴流枳
15	仁賢6年	上532	須流枳
19	欽明6年7年	下95	龜群
19	欽明6年7年	下95	細群
19	欽明23年8	下127	陽香
19	欽明23年8	下127	媛
19	欽明23年8	下127	吾田子
19	欽明26年	下127	頭霧喇耶陞

23	舒明2年3	下229	宴子拔
23	舒明2年3	下229	若德
24	皇極元年9	下239	伊梨柯須彌
24	皇極元年9	下239	伊梨渠世斯
24	皇極元年9	下239	都須流金流
25	孝德大化1年9	下279	宮知
25	孝德白雉元年2	下315	毛治
26	齊明2年8	下329	達沙
26	齊明2年8	下329	伊利之
26	齊明6年1	下343	賀取文
26	齊明6年5	下343	賀取文
26	齊明6年7	下345	賀取文
26	齊明6年7	下345	蓋金
27	天智3年10	下363	蓋金
27	天智5年1/6	下365	能婁
27	天智5年10	下365	奄鄒
27	天智5年10	下365	遁
27	天智5年10	下365	若光
27	天智7年10	下371	仲牟王
27	天智10年1	下375	可婁
27	天智10年8	下379	可婁
28	天武元年5	下385	富加拵
29	天武2年8	下413	邯子
29	天武2年8	下413	碩千
29	天武2年11	下415	邯子
29	天武4年3	下419	富干
29	天武4年3	下419	多武
29	天武4年11	下427	阿于
29	天武4年11	下427	德富
29	天武8年2	下433	桓父(欠) ^{xii}
29	天武8年2	下433	師需婁
29	天武9年5	下441	卯問
29	天武9年5	下441	俊德
29	天武11年6	下453	助有卦婁毛切
29	天武11年6	下453	昂加

^{xii}『日本書紀』の古典文学大系では父の漢字が使われたが、国史大系では欠が使われた。国立公文書館のト部系本では原本では欠だがとなりに赤に漢字で父と注釈をつけてある。

参考文献

＜影印本＞

- 『漢書』(1977) 東京：汲古書院.
『後漢書』(1977) 東京：汲古書院.
『魏書』(1974) 北斎 魏収撰 北京：中華書局.
『後漢書』(1977) 東京：汲古書院.
『三国志』(1975) 東京：汲古書院.
『三国史記』(1982) 朝鮮史学会(編) ソウル：ソウル影仁文化社.
『三国史記』(1964) 東京：学習院大学東洋文化研究所.
『三国史記奥付』(1986) 東京：学習院大学東洋文化研究所.
『国宝岩崎本日本書紀』京都国立博物館所蔵(2013) 東京：勉誠出版.
『新撰姓氏錄』(1812). 浪華：加賀屋善蔵.
『鶴林類事』(1974) 宋孫穆 ソウル：大提閣.

＜論文等＞

(1) 日本語で書かれたもの

- 鮎貝房之進(1973)『姓氏攷及族制攷・市塵攷』 東京：国書刊行会.
池内宏(1951)『満鮮史研究』上世編 京都：祖国社.
池内宏(1960)『満鮮史研究』上世第2冊 東京：吉川弘文館.
伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究』 東京：汲古書院.
伊藤英人(2019)『高句麗地名』中の倭語と韓語『専修人文論集』105: 365-421.
井上秀雄訳注(1983)『三国史記2』 東京：平凡社.
荊木美行(2015)「吉林省集安市発見の高句麗碑について」『皇學館大学紀要』53: 1-32.
小倉進平・河野六郎(1964)『朝鮮語学史』 東京：刀江書院.
黒板勝美(1973)『日本書紀』国史大系編集會 東京：吉川弘文館.
佐伯有清(1983)『新撰姓氏錄の研究』 東京：吉川弘文館.
早乙女雅博(2005)「高句麗の歴史」『高句麗壁画古墳』60-64 東京：共同通信社.
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晉校(1974)『日本書紀』日本古典文学大系67・68 東京：
岩波書店.
白鳥庫吉(1970)『白鳥庫吉全集』第三卷 東京：岩波書店.
武田幸男(1989)『高句麗史と東アジア』 東京：岩波書店.
武田幸男(2007)『広開土王との対話』 東京：白帝社.
平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国古典文学叢書 言語』1: 112-166 東京：大修館書店.
福井玲(2001)韓国語のアクセント『音声研究』5-1: 11-17 日本音声学会.
福井玲(2013)『韓国語音韻史の探求』 東京：三省堂.
本田済(1968)『漢書・後漢書・三国志列伝選』中国古典文学大系13 東京：平凡社.
三品彰英遺撰(1975)『三国遺事考証』 東京：塙書房刊.
村山七郎(1963)「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」『朝鮮学報』26: 189-198.
森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』 東京：大修館書店.

(2) 韓国語で書かれたもの

- 趙炳舜 (1984) 『增修補註三国史記』 ソウル：誠庵古書博物館.
- 李基文 (2004) 『国語史概説』 ソウル：태학사.
- 李基文 (1991) 『国語語彙史研究』 ソウル：東亜出版社.
- 李丙壽 (1977) 『國譯三國史記』 파주：한국학술정보.
- 李丙壽 (2012) 『訳注三国遺事』 파주：한국학술정보.
- 梁紅梅 (2019) 「『三国史記』高句麗紀에 적힌 고구려 인명의 한자음에 관하여」 『第二届新世代韓国学研究者国際学術会議論文集：東亜韓国学』 35-39 台湾：台湾国立政治大学.
- 俞昌均 (1991) 『삼국시대의 漢字音』 ソウル：民音社.

The Goguryeo language with Goguryeo people's name

LIANG Hongmei

This paper aims to investigate all the names of Goguryeo people appearing in *Samguk sagi* and *Nihon Shoki* and identify proper names that can be old Goguryeo language.

The key findings of this paper are threefold. Firstly, 165 proper names appearing in *Samguk sagi*, and 40 in *Nihon Shoki* were confirmed. It is likely that Early Goguryeo people had no surnames, but *Go* (高) and *Hay* (解) can be included in proper names, since they are surnames of the kingdom and clan respectively. Secondly *Sengai sobun* appearing in *Nihon shoki* corresponds to *Iri Gasumi*. However, based on the description in *Shinsen Shouji-roku*, the accurate proper name is thought to be *Irigai sobun*. Finally, there are no examples of female names. Females are addressed using one character of their tribes or fathers.